

三上絢子 提出 博士学位申請論文

『米国軍政下の奄美・沖縄経済』 審査報告書

論文内容の要旨

本論文は第二次大戦後1946年2月に日本本土から行政分離されて米軍の軍政下におかれた奄美群島の人々が、1953年12月に日本に復帰するまでの8年間、どのように生活と経済を支え、また奄美の食文化と伝統を守ってきたか生活者の側に立って考察したものである。著者は当時の地元紙の記事や関係する統計資料、行政関係の文書類に加えて、自身の生活体験も含め多くの関係者からの聞き取り調査をもとにして実証的に分析し、とりわけ奄美と日本本土間、奄美と沖縄間との物流と人々の移動、ネットワークの実態を明らかにしている。

1946年2月行政分離されるまでは物流も人の移動も地理的、物理的な条件を除けばまったく自由であったのであるが、アメリカ軍の統治下に組み込まれたことによって本土との間に、また日本本土への復帰後は米軍統治下に置かれたままの沖縄との間に目に見えぬ強固な障壁（国境）が存在することになった。そのためそれまで本土や沖縄との物流や往来を通し生活を維持してきた奄美群島の人々にとって突然生活が一変させられる事態となった。米軍の統制下にあっても認可された正規ルートによる交易や米軍からの配給によって食糧や日用品を入手できたが、それらは敗戦後の奄美群島の人々が欲していたものとは限らず、また生活必需品は圧倒的に不足していた。奄美の人々は戦災

からの復興に必要な木材をはじめ釘などの住宅建設用の資材や食糧、さまざまな生活必需品を得るために止むに止まれず米軍の統制経済と警察の監視をかい潜って命がけの非正規交易（「密貿易」）を行った。

戦前までは主として奄美の商業を担っていたのは日本本土から来た寄留商人達であったが、米軍統治下になってほとんどが本土に引き上げたため、奄美の人々が商業活動をになうようになる。非正規交易によって得られた生活必需品は自然発生的に生まれた青空市場で取引されたが、それは後に2つの公設市場へと発展し、名瀬の商業活動復興の原動力となった。また「市場（いちば）経済」の発展は名瀬周辺におけるみそや醤油製造業などの食品加工業にも拡がるとともに周辺地域の産業おこしにもつながった。このような名瀬における奄美島民が主体となった「市場経済」の拡大は名瀬市の商業活動の再興をもたらし、名瀬の三つの商店街の発達に寄与したのである。

非正規交易において奄美群島の人々が本土側の商人と交換したものは奄美の伝統的特産物である黒糖や大島紬、鰹節などであるが、とくに黒糖は敗戦後の日本で需要が高かった甘味料として重要であった。本論文は奄美の人々がいかにして奄美の特産品である黒糖や大島紬を再び奄美の主要産業として復興させていったか、政策的な側面と生産の現場の両面から考察する。その過程は奄美の人々が奄美の自立経済を構築する過程でもあり、人々が独自性をもって生き生きと活動した時代であった。本論文ではとくにそれらの商品が本土商人と交換された現場であるトカラ列島北端の口之島における非正規交易の実態と、奄美が本土復帰を果たした後に非正規交易の拠点となる奄美群島南端

の与論島における非正規交易の実態について、生存者に対する綿密な聞き取り調査を通して明らかにしている。それはこれまでほとんど知られていなかった（秘されていた）非正規交易の具体的状況を描き出したもので、本論文を特徴づけるものである。

さらに本論文では奄美群島の復帰運動についても概説して、奄美のおかれた状況とそれを乗り越えていく奄美の人々の活動を描き出している。また沖縄に移住した奄美の人々が那覇市やコザ市で展開した商業活動について、あるいは文化活動に貢献した奄美出身者の個人的な生き方などについて丁寧な聞き取り調査によって考察し、奄美と沖縄が密接不可分の関係にあったことを明らかにしている。

論文の編別構成

本論文（著書）の構成は4部15章からなり、索引も入れて455頁に及ぶ。

以下にその目次を掲げる。目次は詳細に作られており全体の概要を俯瞰するために必要であると同時に、取り上げられているそれぞれの事項についての索引の役割も果たしている。

まえがき

第1部 研究目的および奄美群島の概要と米軍統治下における政策

第1章 研究目的および奄美群島の概要

1節 はじめに 29

2節 本書の目的とそのための視点 30

3節	先行研究	31
4節	研究対象地域	34
5節	研究方法	35
6節	奄美群島の地域的特質と歴史の概観	35
1)	奄美群島の地理的・経済的特性と海上交通の重要性	35
2)	奄美群島の歴史概観と第二次世界大戦直後の経緯	38
注		41
	参考文献	42
第2章	米軍統治下における奄美群島の行政	
1節	奄美群島の武装解除と行政分離	44
1)	ポツダム宣言	44
2)	プライス通告	45
3)	海上封鎖	46
4)	北部南西諸島米国海軍軍政府	47
2節	臨時北部南西諸島政庁	49
1)	軍政の陸軍移管	49
2)	臨時北部南西諸島政庁	50
3節	奄美群島政府	50
1)	「群島政府組織法」	50
2)	奄美群島政府知事の施政方針	51
4節	琉球政府発足	54
1)	琉球政府奄美地方庁	54
5節	奄美群島における米軍政府の統制機構の変遷	54

- 1) 米軍の政策上の統治組織編成 55
- 2) 米軍政策と非正規交易・渡航の検挙関係 57

注 83

参考文献 85

第3章 米軍政府による統制経済

1節 統制政策 87

- 1) 放出食糧問題 87
- 2) 配給制度 88

2節 通貨交換 89

- 1) 第一次通貨交換 89
- 2) 物価対策 95

3節 流通貨幣統一と第二次通貨交換 98

- 1) 通貨流通量の抑制と統制経済 98
- 2) 奄美経済の転換 101

4節 米軍放出食糧価格3倍値上げ問題 102

- 1) 北部南西諸島軍政府長官による食糧3倍値上げ声明 102
- 2) 陳情書 103

5節 段階配給制度 105

- 1) 食糧通帳の自由移動 105
- 2) 配給制度の実態 105

注 107

参考文献 112

第4章 自立経済のための戦略商品、黒糖と大島紬

1 節	奄美群島の主要産業の歴史的変遷	113
1)	奄美群島の生産物	113
2)	重要産業の展開	115
2 節	戦略商品としての特産品黒糖	116
1)	黒糖にみる歴史	116
2)	黒糖と寄留商人	119
3)	非正規取引の戦略品としての黒糖	122
4)	米軍政府の黒糖統制	124
3 節	戦略商品としての大島紬	125
1	基幹産業の大島紬	125
1)	大島紬の歴史	125
2)	平和産業の制限	128
4 節	米軍政府下における紬産業	129
1	米軍政府に紬製造許可申請	129
1)	生産減少の要因	129
2)	ガリオア資金	130
5 節	自由貿易の道	131
1	民間貿易における紬業界の動向	131
1)	「奄美大島に関する決議案」	131
2)	日本本土との間の商取引条件	132
3)	「伝統工芸品産業法」の制定	133
4)	大島紬の韓国生産問題	133
5)	大島紬産業の現状	134

- 6) 大島紬の生産工程 134
 - (1) 奄美大島紬の特質 134
 - (2) 奄美大島紬の工程 135
- 7) 紬業界における雇用関係の推移 141

注 142

参考文献 143

第2部 米軍統治下における非正規交易の形成過程

— 米軍統治下の非正規交易の形成過程と実態像 —

第5章 口之島における非正規交易組織

1節 奄美群島と日本本土との間の地域間交易 147

- 1) 道の島ルート 147
- 2) 奄美諸島およびトカラ列島ルートの重要性 149

2節 国境線上の口之島 149

- 1) 北緯30度～29度間のトカラ列島 149
- 2) 三島村と十島村 150
- 3) 口之島の特質 150

3節 国境線北緯30度 153

- 1) 日本国と外国との間の国境線 153
- 2) G P S 実測標記モニュメント 154

4節 不法越境による非正規交易が展開された背景 154

- 1) 非正規交易の拠点の島 154
- 2) 島内のセリイ岬と赤瀬地域は日本 155

5節 非正規交易の仕組み 155

1	非正規交易船のシステム	155
1)	チャーター船とグループ化	155
2)	非正規交易船システムのパターン	156
a)	非正規交易船・システム1	156
b)	非正規交易船・システム2	157
c)	非正規交易船・システム3	158
d)	非正規交易船・システム4	159
3)	非正規交易船の出港地とルート	160
6節	口之島青年団組織	160
1	口之島青年団組織と役割	160
1)	組織の結成	160
2)	組織の規約	161
7節	非正規交易船からの荷の移動	162
1)	青年団組織による荷役作業	162
2)	青年丸による物資の仕分け	163
3)	西之浜における物資の流通段階	163
8節	西之浜集落の形成	164
1	本集落と西之浜集落	164
1)	青年団組織による小屋建造	164
2)	「浜街繁華街」	165
3)	日本返還後の西之浜集落	167
9節	まとめ	168
注		170

参考文献 171

第6章 米軍統治下における奄美と沖縄との間の非正規交易

— 与論島と国頭村奥集落を中心として

1節 奄美群島与論島と沖縄島国頭村奥集落の流通 173

- 1) 研究の背景 173
- 2) 研究目的 176
- 3) 研究方法 177

2節 奄美群島最南端地域と沖縄島最北端地域の交流 177

- 1) 奄美群島最南端与論島の経済圏 177
- 2) 沖縄島の国頭村奥集落の経済圏 178

3節 第二次世界大戦前の奄美と沖縄との間の物流 180

- 1) 与論島における戦前の寄留商人による商業地域の展開

180

- 2) 奥集落における経済的な核としての共同店 182

4節 第二次世界大戦後の奄美群島与論島と

沖縄島国頭村奥集落の交易の構造 184

- 1) 与論島と奥集落との間の交易 184
- 2) 奥集落における経済構造の構築 186
- 3) 奥集落の物流の仕組み 189
- 4) 非正規交易の拠点となった与論島における交易の構造

192

- 5) 戦前と戦後の正規交易の動向 195

5節 奄美群島の日本返還後における交易の構造 197

- 1 交易の変遷 197
 - 1) 北緯27度の境界線における交易 197
 - 2) 交易地域の変容と地域構造 199

6節 まとめ 202

- 1) 交易拠点地域の変遷 203
- 2) 人的ネットワーク 203
- 3) 交易物資の変容 203

注 204

参考文献 206

第7章 米軍統治下の奄美における正規交易に対する非正規交易の
補完関係

- 1 概況および本章の目的
- 2 先行研究 209
- 3 研究対象地域 210
 - 1節 米軍統治下における正規交易政策 210
 - 1) 米軍政府による直轄組織機構 210
 - 2) 正規交易の発展段階 211
 - 3) LC (Letter of Credit)・民間交易の展開 212
 - 2節 正規交易を補完する非正規交易の展開 215
 - 1) 軍政府の閤船取締の適用範囲 215
 - 2) 正規交易を補完する非正規交易の発展段階 217
 - 3節 拠点としての口之島 218
 - 1) ブラックマーケット化した拠点の島 218

2)	奄美における非正規取締件数と検挙者数	221
4節	非正規交易拠点の与論島	222
1)	拠点の島が入れ替わる	222
2)	非正規交易品の価格設定と交換品	224
5節	まとめ	225
注		227
参考文献		230

第3部 商業圏の形成と展開

第8章 豊かさの原点を「市場」経済にみる

1節	「市場」は豊かさの原点	236
1)	青空市場の形成	236
2)	米軍政府の食糧対策	236
2節	「永田橋市場と栄橋市場」の形成過程	238
1)	二つの「市場」	238
2)	「市場」は、情報、消費、物流の拠点	
3節	産業の勃興	243
1	製造所や商店を自力で立ち上げた事例	243
1)	配給メリケン粉活用の製品化	243
2)	地域産物の活用による諸産業の勃興	244
3)	米軍政府の配給物資によるリサイクル	245
4)	コモンズの利用による商品化	245
5)	循環型自立	246
4節	「公設永田橋市場」	246

1) 公認された需要と供給の場 246

2) 特徴的な商品構成 249

5節 自立経済 251

1) 女性達の役割

2) 事例1 251

3) 事例2 252

4) 事例3 253

5) 「市場」の発展過程 253

6) 日本返還に賑わう「市場」 255

6節 「市場」の変遷 256

1) 「市場」の移転問題 256

2) 「新永田橋市場」 257

3) 米軍統治下の食糧不足を補完した「市場」の衰退要因

260

7節 まとめ 260

注 263

参考文献 269

第9章 米軍統治下における商業空間

1節 奄美における商業圏の形成過程 271

1) 歴史にみる奄美の商業圏 271

2) 黒糖自由取引 272

2節 商社の形成過程 273

1) 第1期商社の事業展開 273

2)	第2期商社の事業展開	275
3節	商業圏の拡大	277
1)	奄美商人と寄留商人による商業圏	277
2)	第3期商社の展開	277
3)	奄美大島の法人企業	279
4節	奄美大島における企業の展開	281
1)	第4期商社の展開	282
5節	三つの商店街の構築	285
1)	商店街の形成	285
2)	三つの商店街の構築	287
3)	自立経済	292
6節	商店街組織	294
1)	開業年次別店舗	294
2)	資本金別店舗数	295
3)	業態別店舗数	296
4)	従業員数別店舗数	298
5)	店舗坪数	298
7節	勃興期	299
1	奄美経済の発展期	299
1)	1956年の奄美における商工業の展開	299
2)	商工業の分類および業種	300
8節	まとめ	303
注		304

参考文献 304

第10章 奄美有良集落における食糧生産および名瀬との間の流通

1節 軍政府の配給制度 307

- 1) 配給システム 307
- 2) 青空市場の出現 307

2節 食糧生産地としての二つの集落 308

- 1) 奄美大島における黒糖生産地の歴史 308

3節 有良集落と芦花部集落の概要 309

- 1) 有良集落の特徴 309
- 2) 芦花部集落の特徴 309

4節 有良集落と芦花部集落の交通機関 312

- 1) 海上交通 312
- 2) 大板付舟（ふう舟） 313
- 3) 船漕ぎイト（労働歌） 314
- 4) 舟小屋 315
- 5) 動力船の運航 316
- 6) 陸上交通 316

5節 有良集落と芦花部集落における産業 317

- 1) 耕作地名と所有者 317
- 2) 農業分野 317
- 3) 生産分野 318

6節 藩政時代の黒糖生産地跡の再利用 319

- 1) 有良地域を中心として 319

2)	黒糖生産跡地の再利用による食糧生産過程	319
3)	藩政時代の黒糖生産跡の段々畑の石積	320
4)	開墾棚畑の生産過程	322
5)	有良地域のアラジウチイト（労働歌）	324
6)	徳之島崎原地域の労働イト	324
7節	私的所有権の確定	324
1)	地租改正	324
2)	測量の方法	325
8節	循環システムによる共同体方式	325
1)	有良集落のユイワク	325
2)	共同体の平等性	327
9節	有良集落と名瀬との間の交易	327
1)	海路と陸路	327
2)	有良集落と名瀬との間における産物の流通	328
3)	名瀬における仲買人との交渉	328
4)	市場の需要と供給	329
10節	まとめ	330
注		331
参考文献		333

第4部 米軍統治下における人口動態

第11章 奄美群島における日本復帰運動

1節 歴史的「2・2宣言」 337

- 1) 重大な覚書 337
- 2) 奄美群島日本復帰請願 338
- 2節 奄美群島日本復帰協議会 339
 - 1) 「奄美大島日本復帰協議会」結成 339
 - 2) 趣意書 340
 - 3) 日本復帰請願の署名運動 341
- 3節 請願書 343
 - 1) 奄美群島即時完全復帰・請願書 343
- 4節 陳情嘆願書 345
- 5節 対日講和条約 346
 - 1) 対日講和条約調印 346
 - 2) サンフランシスコ講和条約第三条 346
 - 3) 日本政府への嘆願書 349
 - 4) 琉球統一 351
- 6節 ダレス声明 352
 - 1) 奄美復帰の父 352
 - 2) ダレス声明による内外記者団会見 353
- 7節 奄美群島の日本返還 356
 - 1) 奄美群島に関する日本国と
アメリカ合衆国との間の協定 356
 - 2) 奄美返還式 362
 - 3) 日本の主権回復 362
 - 4) 日本政府との間における通貨切替え 364

8節	日本復帰運動史	365
1)	奄美群島日本復帰史年表	365
2)	復帰運動の回顧	372
3)	まとめ	373
注		375
	参考文献	379
第12章	米軍統治下における奄美諸島と沖縄諸島との間の人の移動 と非正規交易	
1	研究目的	381
2	先行研究	382
1節	奄美から沖縄への人口移動	384
1)	沖縄への移動過程	384
2)	沖縄への移動先	385
2節	沖縄における就業の展開	388
1)	コザ市とその周辺における行政区別の奄美出身者の事業者	388
2)	那覇市における奄美出身者の物流に関係した事業所	389
3)	奄美から沖縄までの移動過程	390
4)	非正規渡航と物資の移動	392
3節	奄美群島の日本返還	394
1)	奄美出身者臨時登録制	394
2)	琉大大島分校開設	395

3) 拠点としての与論島 395

4節 まとめ 398

1) 人的ネットワークによる奄美から
沖繩への人口移動の特徴 398

2) 人的ネットワークによる人の移動と
非正規交易の生成 398

3) 人の移動と非正規交易の変遷 399

注 400

参考文献 402

第13章 米軍統治下の奄美における人口動態

— 沖繩中心商業地区の奄美出身者の集団社会 —

1節 人口移動の推移 404

1) 人口推移 404

2節 奄美群島の人口動態 405

1) 1920～1960年の人口推移 405

2) 奄美の町村から中心地への移動 406

3節 沖繩における中心商業圏と奄美出身者の社会集団 407

1) 奄美から沖繩への人口の移動過程 407

2) 奄美郷友会の結成 407

4節 就業地域 408

1) 就業の仕分け 408

2) 就業の業種 408

5節 コザの中心商業地区の形成 411

1) コザ商業地区の発展段階 411

2) コザ歓楽街 412

3) 人口移動とコザ 413

4) 移動の変遷 414

6節 まとめ 415

1) 人的ネットワークによる移動 415

2) 渡航の自由 416

注 417

参考文献 417

第14章 奄美から沖縄への移動

— 奄美から沖縄へ移動した人物の永住までの事例 — 419

1節 沖縄の再建期 419

1) 沖縄へ移動 419

2) 経済活動 420

3) 27度線越え 420

2節 勉学と経済活動 421

1) 大志に向かって 421

2) 職域と居住地の変遷 422

3) 芸術活動 423

3節 『目で見ると 養秀百三十年』の養秀人物録 423

1) 輝かしい先輩たちの足跡 423

2) 翔く世界 424

3) 芸術を通して社会貢献 424

4 節 まとめ 425

注 426

参考文献 429

第15章 総括

— 米軍統治下の自立的思考に育まれた奄美経済 —

- 1、自立経済の展開とその背景 430
- 2、ミスマッチな政策 431
- 3、機能しない政策 432
- 4、カツギ屋による食糧補完 432
- 5、食糧不足を補完した食糧生産集落 433
- 6、生活必需品の補完 433
- 7、地域産業の勃興 434
- 8、奄美の未来を踏まえた非正規渡航と群民運動 435
- 9、軍政府の奄美に対する処遇の詳細 435
- 10、税源と教育問題 436
- 11、沖縄における外国人となった奄美の人々 436
- 12、まとめ 437

参考文献 438

あとがき 439

協力者一覧 447

索引 449

第1部「研究目的および奄美群島の概要と米軍統治下における政策」では、戦後本土から行政分離された奄美群島の人々が、米軍統治下の統制経済の実施過程で起こった通貨交換、食糧価格の3倍値上げ問題などに直面した状況などについて明らかにする。第1章は研究の目的と問題関心について述べるとともに前提となっている奄美群島の歴史的地理的概要について触れた上で、先行研究の整理を行なっている。著者はこれまでの戦後米軍統治下の奄美群島に関する研究が政策や制度面からの分析がほとんどであったのに対して、本論文は生活者の側に立って奄美群島の戦後史を分析したものである点で特徴があるとしている。

第2章は米軍の統治政策と統治機構を概説する。地元紙の記事に基づいて整理した米軍の政策と非正規交易（「密貿易」）と非正規渡航（「密航」）に関する年表は本論文の理解に役立つ。第3章は米軍政府による統制経済とそれによって生じた人々の生活の混乱と問題点に言及している。食糧不足に加えて放出食糧価格の3倍値上げ問題、物価統制、実状にそぐわない配給制度、さらに旧日本銀行券とB軍票および証紙を添付した旧日銀券の交換が人々の生活を混乱させた経緯と原因を述べている。

第4章は奄美の特産品である黒糖と大島紬について、その歴史と生産のあり方や米軍による統制の経過について考察し、奄美の経済的自立の重要品として描き出している。人々は本土で需要の高い黒糖を非正規交易の戦略商品として位置づける一方、奢侈品として戦中から生産を抑制された大島紬を再び奄美の特産品にするため米軍との交渉を

展開したが、その経緯や特産品の詳細が記載されている。

第2部「米軍統治下における非正規交易の形成過程」では、米軍統治下で不足する食糧や生活必需品を得るために行われた非正規交易の実態が、関係者からの聞き取り調査を通じて明らかにされている。第5章ではトカラ列島北端の口之島で行われた非正規交易の実態を考察し、口之島青年団や島民の組織と活動内容を調査し、一編のドキュメンタリーのように具体的に描き出している。

第6章では、奄美群島が日本に復帰した1953年以降国境線は北緯27度線になるが、もともと沖縄との関係の深かった奄美の人々は口之島と入れ替わるかたちで奄美群島の南端にある与論島を活動の拠点とした。そこで行われた対岸の沖縄本島北端の国頭村奥集落の人々との非正規交易について詳細に考察している。奄美と沖縄は南西諸島の一員として奄美が本土に復帰するまでは一体であったのもともと関係が深かったことから、こうした交易のネットワークを通して奄美の人々の沖縄への移住も増えていった。それは第4部の課題として引き継がれている。第7章では米軍統治下で認められていた正規の交易と民衆レベルでの非正規交易の関係性について分析し、両者が補完関係にあったとしている。

第3部「商業圏の形成と展開」では、戦災にあった名瀬の人々が生活必需品を得るために自然発生的に生まれた青空市場（いちば）を利用し、露天商たちが正規交易品も非正規交易品も近隣農村からの農産物や地場の加工食品も扱う様子の詳細が記載されている。その青空市場は公設の永田橋市場と栄橋市場となり、そして名瀬の商業活動を復

活する原動力となっていく過程について考察を行っている。第8章では豊富な事例を挙げながら「市場」経済の豊かさについて論じている。

第9章では奄美の商業の歴史を分析し、近代以降の本土からの寄留商人の支配と米軍統治下になってからの彼らの撤退、その後の奄美商人の活躍について記述している。こうした奄美における商業発展は名瀬の3つの商店街の形成を促したのである。第10章では名瀬の食糧不足を補った有良（あつた）集落における甘藷生産が、藩政時代に開墾され近代になって放棄された黒糖生産畑を利用して行われたことを現地調査によって裏付けている。

第4部「米軍統治下における人口動態」においては、主要には奄美と沖縄との間の人的交流がテーマになっている。主として奄美から沖縄への移動であるが、1946年2月の行政分離により奄美と沖縄は本土から切り離されたが、米軍統治下では一緒だった。しかし奄美が1953年12月に日本に返還されると沖縄は外国となり、密接な関係のあった島々は再び分断されることになる。奄美の人々は以前から沖縄に渡っていた親戚縁者をネットワークとして正規、非正規のルートで渡航して関係を維持するのであるが、著者は奄美と沖縄の関係者への綿密な聞き取りをもとに実証している。

第11章は奄美群島の日本復帰運動について当時の陳情書類などを用いて概説し、第12章では仕事を求めて奄美から沖縄へ渡った状況を沖縄における就業構造と人口移動の点から見るとともに、第13章では送り出した奄美の村々の人口の変化とコザと那覇における奄美出身者の就業形態を考察し、第14章では奄美から沖縄に移住した個人の事例に

ついて紹介している。第15章では本論文を総括し、「自立経済を目指した米軍統治下の8年間」の奄美では「混乱期でありながらも自立への努力があった」と著者の思いをダブらせるかのようによまとめを記している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、戦後の米軍統治下の奄美群島の歴史を米軍政府の指令や政策、さまざまな制度的枠組がどのように奄美の人々の生活に影響を及ぼし、人々は生きるためにいかに対応していったかについて、あくまでも生活者の側に立って調査分析した点に特質がある。とくに綿密な資料調査と、巻末にあげられている聞き取り対象者の一覧からもわかるように、実に多数の関係者に対する丁寧な聞き取り調査をもとにして実証的に分析していることは大いに評価できる。とくに第2部第5章で取り扱った口之島における非正規交易（「密貿易」）、非正規渡航（「密航」）の実態の解明は、非正規交易が違法行為であったが故にこれまで口を閉ざしてきた関係者の信頼を得てはじめてできたことと思われる。同様に第6章の与論島における非正規交易の実態分析、第10章の有良集落の甘藷生産の実態、第12章の沖縄の商業活動に果たした奄美の役割の分析もたいへん興味深い。

敗戦による米軍統治は、それまで物と人の交流のネットワークを作りながら暮らしてきた奄美群島など南西諸島の人々の日常生活を一変

させた。1946年2月に断行された北緯30度線を境にした行政分離により本土との関係は米軍の管轄下で厳しく制限された。黒糖や大島紬を売って生活必需品を買い入れてきた人々は正規の交易や配給では手に入らないものを非正規交易で求める一方、島内での自給を高める方向に動いたのであるが、そこには長い歴史の中で築かれてきた諸島を結ぶ、あるいは本土と結ぶネットワークがあった。本論文は地元状況に疎い米軍政府の統治に翻弄されながらも、その中でしたたかに生き抜いてきた奄美の人々の日常生活を、自身の幼少期の体験や経済統計、当時の新聞記事、聞き取り調査に基づいて、米軍政府の統制経済の実施過程で生じた問題点とともに実証的に分析しており、奄美群島の戦後社会経済史として、とりわけ生活経済史として価値が高い。

さらに本論文の対象は米軍の統治下に置かれた8年間の奄美群島の人々の暮らしであるが、この中で興味深く示唆されていることは、同じ生活圏に暮らしていた地域が突如分断統治された場合の生活の困難である。食糧や生活必需品の確保から雇用や教育、医療などの生活に必要なさまざまな関係、すなわちその地域の再生産圏が崩壊の危機にさらされることの重大さが示されている。たとえ戦闘がなくなったとしても人々は翻弄され、自らの生き方、暮らし方を手探りで自立への道を探す以外にないということであり、本論文が明らかにしたのは奄美の人々のそうした苦境の中で暮らす生活実態であり人々の歴史でもあった。米軍による2度にわたる通貨交換による奄美の人々の混乱と困惑はグローバル化した現代世界でもありうるし、生活圏の分断統治も世界各地ではありふれた現状だとも言える。本論文が取り扱ったの

は戦後の一時期の奄美群島の歴史ではあるが、そこには現在の不安定な世界各地で起きている現状が映し出されているとも言える。

問題意識も明確で大変ユニークで労の多い聞き取り調査と資料の渉猟に基づいた論文として評価できる。全体としての内容面を評価する一方で、タイトルからすれば「米国軍政下の沖縄経済」の分析がなされていなければならないのであるが、奄美との関係における沖縄の、それも那覇とコザの商業に限定されており、メインタイトルは「米国軍政下の奄美の社会経済」とした方がよかったのではないかと思われる。このことに関連して、第4部は論文構成上内容的にはもう少し整理し、「軍政下の沖縄経済」については今後の課題としておくべきであったと思われる。筆者としては生活実感としての沖縄との関連性を抜きがたいとの思いもあったことが察せられることから、ここは指摘するだけにとどめたい。

また長い論文なので、内容的に強調すべき問題は繰り返し記述することも必要ではあるのだが、各章の詳細な記述に関してはできるなら不要な重複記述は省いたほうがよいと思われる点がいくつか散見される。

本論文は著者の原点でもある名瀬における生活体験と故郷に対する強い「思い」から発せられた明確な問題意識に基づいて調査し考察されたものであり、生活者の視点から米軍統治下の奄美経済を検討したものとして独創性も高く詳細な現場状況の描写も他に類のない研究として評価できる。また本論文（著書）は奄美の社会経済史として書かれたものであるが、戦後日本の歴史を理解する上でも重要な論文とい

えよう。本論文は内容的に高い独自性が認められるだけでなく、綿密な調査による分析と叙述上の構成を備えており、3人の審査員は全員一致して本論文が論文博士の学位を授与するに十分な内容を有しているとの結論に至った。

平成26年7月9日

主査	國學院大學教授	菅井益郎	㊞
副査	國學院大學教授	古沢広祐	㊞
副査	法政大学教授	屋嘉宗彦	㊞